

そこで、イエスは次のように言って二人の弟子を使いに出された。-中略- 弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。-中略- 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。はっきりしておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」一同は賛美の歌をうたってから、オリブ山へ出かけた。
-マルコ 14 章-

神さまの愛のしるし

秘跡の中で、最も尊い秘跡は「聖体の秘跡」です。「神のものとされること」が私たち人類の究極の「救い」であり、ご聖体をいただくことは、この救いの「確かなしるし」だからです。

とはいえ、なぜ、神が「ご聖体」にまでならなければならなかったのでしょうか？ その奥義が、旧約聖書全体を通して示されたイスラエルの歴史にあるのです。

かつて、エジプトの奴隷であった民を、神は、モーセを遣わして解放し、シナイ山において、民が二度と人の支配下で服するのではなくはなく、神に忠実に服する「神の民」となるための「契約」を結んだのですが、のど元過ぎれば熱さ忘れ、お母さんがすべてだった赤ちゃんが成長して少し力がついて来ると、一人で大きくなったような顔して、母親を必要としなくなるように、民は、神に服するよりも、自分自身の欲望を優先する肉の輩だったのです。

すなわち、最初の契約（旧約）の下で犯された罪の贖いとして、主キリストが血を流して、ご聖体となってくださったので、このキリストをいただく私たちが、すでに約束されていた「神の子ども」がいただく永遠の財産を受け継ぐこと（新約）が出来るのです。

『ご聖体』は主イエスが、ご自分の命よりも友である私たちを大切に思ってください確かな「愛のしるし」なのですが、ある要理の席で“友のために命を捨てる。これ以上に大きな愛はない”と発した神父の言葉に「キリスト教のキレイごと」と憤慨して部屋を出て帰ってしまった婦人がいました。半年後に、高齢出産を経た彼女は再び神父のもとにやってきて言いました「神父様、今わかりました。私も我が子のために命を捨ててく
父のもとにやってきて言いました
が子のためなら命を捨てられま
す！」と。

我が子のために命を捨ててく
腑に落ちたなら、私たちは生涯
真の「神の子ども」になるでし

肉の弱さに囚われる自分の無力
わいそうに思ってくださいよう「神
りましょう。そしてこの度、初聖体の恵み
てくださいますように。



ださる神さまの愛が、心の
神様を裏切ることがない、
よう。

さを自覚し、神さまが私をか
の憐れみ」をいつも願う人にな
に与った子供たちの良き同伴者となっ